オブジェクション１７０

あつれき編

本編は、次の１３項目からなる。

① 福岡５歳児を餓死させた女たち
② １８年間自宅軟禁された女姓その後
③ 女性理事の話が長いとぼやいた森会長
④ 五輪開会式典で渡辺直美をブタにする演出
⑤ フェイクプラカード「電気は要らない」
⑥ 黒染め強要訴訟
⑦ 黒人の命は２７００万ドル
⑧ アメリカではアジア系の人々が暴行される
⑨ 中国政府のウイグル族いじめ
⑩ 中国政府の台湾いじめ
⑪ 英王室、生まれてくる子の肌の色は何色か
⑫ プーチンの「永遠の免責」
⑬ ５万円ばらまきを公約にして当選する

・文中敬称略。
・文中の会話文には、筆者が推測するフィクションが含まれる。

岡森 利幸

・以下の【 】内は、新聞記事・週刊誌の引用・要約を示す。

① 福岡５歳児を餓死させた女たち

【毎日新聞朝刊2021/3/3 社会

福岡県警は、福岡県篠栗（ささぐり）町で２０２０年４月、三男の５歳児（翔士郎）に食事を与えず餓死させたとして、母親の碇（いかり）利恵（39）、知人の赤堀恵美子（48）両容疑者を保護責任者遺棄致死容疑で３月２日に逮捕した。１６年４月ごろ、二人は、子供が同じ幼稚園に通っていたことでママ友として仲良くなった。しかし、次第に碇容疑者は赤堀容疑者の言いなりになっていったという。赤堀容疑者は、碇容疑者の元夫が不倫をしていたとウソをつき、浮気調査や不倫相手に渡す慰謝料の名目で、現金を払うように求め、１９年６月～２０年４月、計約１８７万円をたまし取ったとして詐欺の容疑で逮捕、起訴されている。

両容疑者は１９年８月ごろから翔士郎ちゃんの食事の

量や回数を減らし、２０年３月下旬に重度の低栄養状態に陥らせた。それでも食事を与えず４月１８日に餓死させたとしている。体重は１０キロほどで同年代の平均１９．６キロの半分ほどしかなかった。
県警は、赤堀容疑者が碇容疑者の家庭の生活費を事実上管理し、男児の命を保護する責任があったと判断し、今回の逮捕に踏み切った。
経済的に困窮する母と子供三人の一家に、行政・教育機関が家庭訪問しようとするが、赤堀容疑者が抗議し、拒絶していた状況があった。】
【毎日新聞朝刊 2021/3/5 社会
福岡５歳児餓死、１０日間、水を与えず。母は自由な金を持たず、赤堀容疑者に渡った金は１０００万円を超えたとみられる。】
【毎日新聞夕刊 2021/3/5 社会
福岡５歳児餓死、偽のトラブルで接近か。ママ友として母に接近した赤堀恵美子容疑者が、碇利恵容疑者の家庭の生活保護費を管理していた。】
【毎日新聞朝刊 2021/3/6 社会
福岡５歳餓死、親族が児相に数回相談していた。児相は会見ではそのことを公表せず。家賃滞納で強制退去後の住所を「個人情報で教えられない」とした。自相は、見守り対象の一番軽微な事案のＣケースと判断していた。】
【毎日新聞朝刊 2021/3/24 社会
福岡５歳児餓死、罰金ルールで生活支配。赤堀被告は「子供に笑いかけない」「実家に連絡を取らない」などのルールを課していた。破ると罰金。】
【週刊新潮 2021-3月１８日号　我が子を餓死させた母親への洗脳支配
社会部デスク「赤堀は、碇母子の生活費や食事をすべて管理し、精神面でも完全に支配下に置いていた。碇一家は、赤堀から渡されるパンや米など、限られた食料を分けて食べていた」「１８年５月ごろ、赤堀が碇も絡んだトラブル話を捏造。ボスが解決してくれたと言って、碇には示談金を要求した」「ママ友たちが碇の悪口を言っているといい、不安にさせた。自分が相談相手になってあげると申し出た」
「赤堀が碇の夫の浮気話をでっち上げ、浮気調査名目で現金や預金通帳を奪った。離婚後に月２０万円ほどの生活保護まで根こそぎ、計１２００万円ほど搾取していた。昨年1月には、食事を与えていないことが露見しないよう、碇に命じて翔士郎ちゃんを幼稚園を退園させた」「翔士郎ちゃんが亡くなるひと月前、碇の

親族が子どもたちをスーパーに連れて行ったとき、〝おなかすいとるやろ、好きなもんもっといで〟と言うと、翔士郎ちゃんはママの好きなお菓子を選んだ」（自分の分よりママのためのものを選んだ）

近隣住人「兄が給食費を持参しなかったため、担任がクラスみんなの前で給食費を持ってくるようにと言ったそうです。それを聞いた赤堀が学校に怒鳴り込んだ」

「赤堀のせいで碇家の子どもたちは給食費が払えなかったわけです。みんなの前でいやな思いをさせられてもがんばって学校に行っていたのは、学校で給食を食べなければ生きてゆけなかったからでしょう」　兄二人は小学校の給食で命をつないだが、翔士郎くんは、幼稚園にも行かせてもらえず、給食もなかった。【週刊文春　2021-3月18日号　ママ共喰いの蹂躙人生・赤堀恵美子

「ママ友たちが悪口を言っている」「私は味方」その巨体の女は三人の息子を持つ母親に甘言・虚言を弄して近づいた。さらに夫（親族までも）を引き離し、幸福な一家を蹂躙しつくした恐怖のママ友の正体を暴く。地元記者「赤堀が主で碇が従の関係にあった。ある朝、道端で深堀が碇にわめき散らし、碇が黙って聞いていた姿を見た人がいる」

二人を知る小学校の保護者仲間（赤堀がボスと呼んでいた人）「（赤堀は）自分の子供には水泳やバレエをやらせて、きれいな服を着せていた」「お通夜の日、誰が亡くなったのか尋ねると、〝バカの一番下の子どもったい〟と言った。彼女は碇さんのことをバカとか、アレと呼んでいました」「葬儀代は学会が出した代わりに、（集まった）香典は学会に渡した、という話を聞いた。彼女は〇〇学会の信者なのでね」

葬儀代や香典の話は、赤堀のウソだった。（翔士郎くんの香典まで、学会をダシにして赤堀が全部取り上げたことになる）

碇の代理人「赤星に勧められて学会に入っていました。現在は退会済みです」

ママ友としての主従関係に、学会員の上下関係が加わった。碇が、亡くなる間際の翔士郎ちゃんに唱えていたのは、学会のお題目だった。

福岡県大川市の男性「恵美子の実家はもともと父親が学会員だった。一家は、かなり金銭面で苦しんだようです。三人兄弟で、長男は会社の金をつまんで逮捕された。返済のため母親が近所を回って金を借りていた。いまだに返してもらっていない者もいる。長女は、死産した赤子を埋めて警察沙汰になった」

赤堀は大分のトラック運転手に嫁いだが、1年ほどして夫名義で数百万円の借金を作って逐電した。その後、別の男と再婚した」】

【週刊文春 2021-3月25日号 「常に監視」洗脳母39年の孤独

逮捕翌日の送検時、碇利恵はやせ細った姿で、うつろな目で護送車に乗り込んだ。容疑を否認する赤堀は布で顔を覆い隠していた。

身の回りで絶えず金銭トラブルを起こしていた赤堀は、相手を騙すことにまったく抵抗感がない女だった。

「ママ友が悪口を言っている」「親族が裏切っている」と言って、彼らから引き離し、さらに夫の浮気も捏造し、19年5月に離婚させた。当初は対等だった二人の間柄が、道端で一方的に罵倒するまでに。

「やがて、赤堀はしつけと称して翔士郎ちゃんを叩いたり、押入れに閉じ込めるようになり、その間、碇は家から出され、外で泣いていた」

碇が中2のとき、父が勤めていたスーパーが閉店し、一家はひっそりと引っ越して行った。高校に進学したが、両親は離婚した。二十代後半で結婚してからは、優しい夫とともに幸せな家庭を築いていた。しかし、赤堀との出会いで、すべてがぶち壊される。

碇は、一軒家に一人で暮らす元夫や、母親ら親族を頼ることもできず、困窮を極めていく。

翔士郎ちゃんは亡くなる前、ふらついて歩けなくなった。碇は「翔ちゃんの体調が悪い」と何度も訴えたが、赤堀は「仮病や」「寝れば直る」と取り合わず、病院にも行かせなかった。

「碇は、ありもしない十二台のカメラに監視されていると信じ込み、怯えていた。三男が餓死した際、本人も体重三十キロ台までやせ細っていた」】

◇概要

そのとき碇一家（母・利恵と男児三人）は、極貧の生活をしていた。赤堀が定めたルールにより、縛られていた。碇一家の家計を握っていたのが、赤堀恵美子であり、徹底的に搾り取り、与えていたのはわずかな食料だけ。しかも、赤堀ルールを押し付け、ルール違反をすれば、食事抜きにされた。

結果的に、碇は、赤堀の口車に乗せられ、無実の夫を裏切り、家庭は乗っ取られ、1000万円を超す金を搾り取られ、一番幼い子は飢え死に、自分は保護責任者遺棄致死容疑で逮捕される事態になった。身も心もボロボロ。警察署などで事実を知らされた今、

「どうして翔士郎を助けてやれなかったのか！　母として失格、人間として失格よね！」と悲痛な叫び声を心の中であげていることだろう。痛恨の念は一生消えそうもない。

一方の赤堀にはまったく反省の色がない。

〈私はアレのガキにしつけをしてやっただけよ〉

◇公的な支援・保護

ここでも児童相談所の対応が問われる事件だ。

児童相談所は、この一家が家賃滞納で強制退去させられたことを知っていたし、その後の移転先も知っていた。この一家は生活保護を受けながら、なぜ家賃を滞納したか、理由を見極めるべきだった。見守り対象の一番軽微な事案のCケースだったというのは、甘すぎる。

家庭訪問しようにも、赤堀が強硬に反対したとされるが、それに圧倒されて、すごすごと引き下がっていたんでは仕事にならない。

心配して尋ねてきた親族を門前払いをするような仕打ちをした。個人情報保護をたてにして、親族と情報を共有しようともしない。児童を保護するより、個人情報を保護することを優先するようでは、本末転倒だ。

生活保護をしている市の対応も不十分だろう。生活保護費を受給しているのに、家賃を滞納し、飲まず食わずの生活をし、小学校で給食費を滞納している実態をつかんでいなかった。

学校側にしても、どうして児童が給食費を持ってこないのかを考えるべきだ。〈親が給食費を持たせていない〉ことを真っ先に疑うべきだろう。滞納したことで、まるで見せしめのように、クラスの前で児童を叱責しては、だめだろう。そんなことされたら、児童は一生のトラウマになりそうだ。見せしめにするなら、児童でなく、その親の方だろう。赤堀が学校へ怒鳴り込んだのは、一理ある。この場合、赤堀が給食費を出さなかったからであり、逆ギレになる。

ところで、児童・生徒たちから給食費を集めることは、教員にとって気苦労の多いことだ。第一、金を集めたり数えたりするのは学校の事務的な仕事であり、教員の仕事とは思えない。いまどき当然、銀行引き落としなどを導入すべきことだ。

◇赤堀のやり方

ママ友として、孤立していた赤堀に最初に接近したのは碇の方だったとされる。赤堀と碇は、仲良くなった。

そのうち、赤堀は碇を不安がらせることを言い出す。
「他のママとも連中があなたの悪口を言っている。陰口を叩いている。私だけよ、あなたの味方は」
それはママ友から引き離すための効果的なセリフになった。悪口を言われていることに思い当たることはなくても、孤立感が増してくる。頼りになるのは赤堀だけと思い込むようになる。
赤堀は、ボスの存在をでっち上げている。ボスが常に監視していると思うと、うかつなことはできない。
「どうすればいいの？」
それを赤堀が指南することになる。
やがて、赤堀は、碇の夫と離婚させることに成功すると、事実上、碇家の女主人として君臨し始める。碇一家の生活費の大半が赤堀に渡っていた。本来は碇の収入になるべき金をほとんど吸い上げ、パラサイト（寄生虫）生活をしていたのだから、強欲な女だ。彼女の、**したたかな生存戦略**だ。生物界ではありふれたことだが……。
他人を踏み台にして自分が生き残るたくましさがある。そのたくましさは、赤堀の幼少のころからの貧困生活にあるのかもしれない。そして金に執着していた。彼女はいじめっ子だった。
事件の報道により、少女時代に彼女にいじめられたと証言する者たちが続々現れているという。いい意味でなく、彼女にはたくましさがあった。その頑健な体格を生かし、級友たちをいじめることに得意だったわけだ。いじめることで、見返りの「実利」もあったのかもしれない。
碇の収入として、行政からの生活保護費や子ども手当があるだろうが、すべて赤堀が取り上げていたとみえる。なお、元夫からの養育費は、関係を絶つという赤堀の思惑のためだろう、離婚の際に不要とした。
それだけでなく、碇家の生活費を徹底的に切り詰めさせていた。碇恵美は家賃も払えなくなり、追い出され、住所を変えている。親族にはその新しい住所がわからなかった。赤堀に「親族とは連絡を取るな！」と強く言われていた碇だった。
とくに、生活費を切り詰めたのは、食費だろう。赤堀がきっちり管理していた。信仰心を持った母親は空腹に耐えられたかもしれないが、食べ盛りの３人の男児にはきびしい。食べられるものは給食だけになっていた状況がある。
「赤堀ルール」によって、男児たちが空腹に耐えかね、冷蔵庫をあさったりすると、罰則が課せられ、さらに

食事抜きにされたのだから、たまらない。ますます苦しくなる。しかし、赤堀には、その苦しさが想像できない。その堂々たる体格、でっぷりとした容貌を見ると、食べるものにはほとんど不自由しなかったのだろう。空腹の苦しさなど知らない。他人の空腹感など、彼女の知ったことではないのだ。

小学校に通う二人の兄は、給食費も持たせてもらえなかったというから、すさまじい徹底ぶりだ。

碇家の生活費を切り詰めれば、自分の自由になる金が増えるから、実にたのしいパラサイト生活だ。赤堀の夫も、他人の生活費を吸い上げている妻に満足していたことだろう。そのことに気づいていたはずだ。

「こいつ、意外に甲斐性があるな、へへへ」とほくそ笑んでいたりして……。

◇囲い込まれた碇

なぜ、碇恵美がここまで赤堀恵美子に傾倒し、言いなりになってきたのか、大きな疑問が残る。一つは、言いなりになって行動することが、悩まずにすむことが挙げられる。

人間関係のトラブルを次々に解決してくれる赤堀に、碇は心酔していたのだろう。

碇には、赤堀がママ友として頼りになる先輩に見えたのだろう。気の弱さをもち、心細さを感じていた碇恵美は、赤堀の口のうまさに引き込まれたようだ。年長者であり、体力的にも強い女として目に映った。

「それに比べて、夫は頼りない。優しいけれど、何を考えているのか、わからない……」と思ったりして。少女の時に両親の離婚をみており、男を信用していなかったのかもしれない。

赤堀のウソが炸裂する。「あなたの夫が浮気している。独身だと偽って、女といい仲になっている！　女は怒りまくっている。慰謝料を払わないと、収まりそうもないわ！」

本妻の碇恵美の方が、慰謝料をもらうべきところだし、独身だと偽ったなら、夫の方が全面的に悪い。しかし、碇恵美はその慰謝料の請求に従ってしまう。〈女性が怒りまくっているのなら、私に直接言わず、なぜ赤堀に言ってきたのだろうか〉という素朴な疑問を、碇が抱くことはなかった。

碇恵美ができるだけの金を工面すると、赤堀恵美子は〈こいつ、金を出す女だ〉と見込む。そう見込んだら、次々に金を要求するのが詐欺師の常套手段だ。赤堀も、その例に漏れなかった。

親切ごかしに忠告するような態度から、やがて圧力

を加えるように、強迫的になってくる。「こんなルーズな金の使い方では、だめよ。私が家計をしっかり管理してあげる。あなたは私の言うとおりにしていればいいのよ」

◇翔士郎くん

特に赤堀の攻撃対象になったのは、翔士郎くんだろう。5歳といえば、自立心が芽生え、親の言うことをすなおに聞かなくなる。碇の家庭に入り込んだ赤堀が、徹底的に翔士郎くんをいじめた。叩く、押入れに閉じ込める。食事を与えない。水も与えない。赤堀にとっては、それはしつけであり、ルールを破った罰則だった。

私が思うに、翔士郎くんは、赤堀の正体を見破っていたのだろう。赤堀の姿が、ママに近づく「邪悪な存在」として、純真な目に映った。〈こんな女をママに近づけてはいけない！〉

翔士郎くんは赤堀に対して敵対的な態度をとったから、赤堀が徹底的にいじめぬいた。

飲まず食わずの翔士郎くんは、しだいに衰弱し、とうとう餓死したわけだ。赤堀に対する死の抗議だったかもしれない。

赤堀は逮捕されても、ふてぶてしい。餓死させたという罪の意識など、まるで感じていないようだ。通夜の時、〝バカの一番下の子どもったい〟と言い放った言葉が、それをよく表している。

母は思考停止に陥っていたと思われる。指示待ちの状態だった。赤星が告げる言葉を全面的に信頼し、頼っていたし、そして赤堀が叱咤・叱責する怒声に怯えていた。

赤堀の厳しい食事制限があったことが、思考を停止させる要因の一つになった、と私は推測している。さらに、宗教の力が加わっている。赤堀は碇を学界に入信させた。これで肉体的、精神的な両面で、主従関係が確立する。赤星が碇の家計を管理することで、経済的にも、管理体制ができあがる。もちろん、赤堀の狙いは、パラサイトに徹し、獲物から養分を吸い取ることだ。吸い取れるだけ吸い取って、わが身を肥やす。

②　18年間自宅軟禁された女姓その後

【毎日新聞夕刊 2020/12/28 一面、社会】母に「消された」18年

かつて福岡で自宅軟禁された少女は33歳の大人の女性になった。過酷な体験を語る決意で、彼女は記者の

取材に応じた。その後も生きづらさを抱えてきたという。２３歳のとき、名前を咲来美波（さくらいみなみ）に変えた。

２００５年１１月、警察に保護されたとき、彼女は身長１２２センチ、体重２２キロ。小学校低学年と見間違うほど衰弱していた。母から暴力を受け、自宅に軟禁され、一度も学校に通わせてもらえないまま１８歳になっていた。家族として、このとき父親が同居していた。兄と姉はすでに独立していた。（一緒に住んでいた時期があった）　母親は就学させなかった理由として「障害による発達の遅れが恥ずかしく、外に出すと迷惑がかかると思った」と語った。

咲来さんの記憶によると、きっかけは０５年保育園で、隣の席の友達が食べ切れなかった給食を食べてあげたことを告げたとき、母親は「この盗人が！」と激怒し、以来、家から出してもらえなくなったという。

その後、学校と教育委員会や児童相談所はＡ（咲来さん）を未就学児童としてとらえつつ、虐待の危険性を低いと判断していた。学校が家庭訪問するが、Ａの状況を把握できなかった。保護者との面談で、学校に行かせない理由として「障害とそれに伴う症状があるため、学校に行かせることはできない」という旨の説明を受けていた。

Ａさんは学校の教員が自宅を何度も訪ねてきたことを知っていたが、母親に居留守を使われるか、玄関先で対応されるかした。ベランダに出るのも許されず、食事は1食しか与えられなかったり、腐ったご飯をわざと食べさせられたりした。勉強は「兄や姉の使い古しのドリルで漢字の練習をしたり、教科書を読んだりした」と振り返る。

母親の４０歳の誕生日だった２００５年１０月２８日、留守中にテレビを見ていたという理由で、いつものように殴られた。いつかお母さんは変わってくれるんじゃないか、そんな希望が崩れた。翌日から3日間、押入れに隠れた。もれ聞こえてきたのは「何か罪に問われるやろか」と、自身の心配をする母親の言葉だった。

「もうこれ以上一緒にいても変わらない」。１１月１日の早朝、着の身着のまま逃げ出した。近くの公園のベンチに座り込んでいたところ、通行人の女性に「おうちはどこ？」と聞かれた瞬間、「あんな家に戻りたくない」と泣きついた。

事件発覚後、Ａさんは顔や背に殴られた傷を負っていたから、母親は傷害罪で罰金１０万円の略式命令を受けただけだった。日常的な虐待の罪に問われることはなかった。

保護された後、女性保護施設に入所したが、何をするにしても母親の許可がないとできなかったため、トイレや食事の許可をもらわないと落ち着かなかった。今後の生活のため、周囲の勧めで療育手帳を取得することになり、軽度の知的障害と診断された。

２３歳のときに戸籍を抜いて名前を変えた。意を決し、逃げ出してきた自宅を訪ねた。母親にどうしても聞きたいことがあった。「どうして私を虐待したと。私の人生どうしてくれるん？」（この続きは、本文で）】

◇問題点

比較的長文の記事が夕刊の一面と社会面に掲載された。記者がよく取材して書いたことに、私は感心する。咲来美波さん（A）自身が、つらい過去を思い出しながら、取材に協力したものであり、私はその健気さに好感を持つ。彼女は客観的に思考できる人だと推察する。

Aさんは、学校にも行かせてもらえず、ロクに食事をあたえられず、「留守中にテレビを見た」という些細なことで怒鳴られ、殴られていた。近所にも、その声や物音が聞こえていたはずだ。〈あの家には問題児がいる、たいへんやろな〉という認識だったのだろうか。

この一家は経済的に貧しいわけではなく、Aさんだけ、家の中で家畜以下の扱いを受けていたのだから、ひどい話だ。母親が主導したことだが、父親や、以前同居していた兄と姉の立場や見解は、どうだったのか。自分の娘がこれほど虐待されて、一緒に生活しながら見て見ぬふりをしていた父親も、どうかしている。ひどい父親だ。はっきり言えば、彼らは母親と共犯的な人たちだ。Aさんが改名した理由に関連しているようだ。こんな家族とは縁を切りたいと思ったことだろう。

さらに未修学児を長年放置していた学校や行政にも問題があったことは明らかだ。彼らにも責任があった。彼らもそれなりの対応はしていたが、踏み込みが足らなかった。母親の「障害とそれに伴う症状があるため、学校に行かせることはできない」との説明に、変に納得してしまったところがある。

〈障害があるから、学校に行かせないのね。ふ～ん、それで家の中で保護しているわけね〉

障害という言葉で、彼らはみんな納得してしまっている。障害を口実に「虐待している」とは、少しも疑っていなかった。親が児童を一度も合わせようとしな

いのは、虐待の跡を見せられないからだろうと、怪しまなければいけないところだ。どんな障害なのか、自分の目で見るなり、診断書を出させるなり、しなければいけないだろう。少なくとも、身体的障害か、精神的障害かを見極める必要があるだろう。保育園に通っていたときの記録や保母の所見などを取り寄せて調べることもできたはずだ。

彼女が軟禁された開始時期は、保育園のころだったわけで、軟禁期間は15年続いた。それでも、彼女は耐えていた。ほかに頼るものもいなかったのだろう。見て見ぬふりをする家族やその親族にも、彼女は相談することさえできなかったわけだろう。

これが虐待として犯罪になる「恐れ」は、母親にもわかっていたようだ。母親は、Aさんの将来をどう考えていたのか。

母親には「こんな子は病気になり、そのうち死んでしまえばいい」と考えていたフシがある。Aさんが病死することを期待していたとみなされても仕方がない。つまり、これは単なる軟禁ではなく、育児放棄であり、義務教育違反であり、さらに言えば、殺意があったと考えられる。

思惑どうり病死したとしても、医者がその体を見れは、栄養失調による餓死あるいは虐待死であることが一目瞭然であり、確実に警察に通報されてしまうだろう。殺人罪が適用される可能性が高かった。

犯罪になるかどうかというより、自分の娘を虐待していた「神経」がどうかしている、というべきだろう。母親なりに、そうした行為に走らざるを得ない事情があったのだろうか。それにしても、そこまで自分を「オニ」にする必要があったのだろうか。これほど人権蹂躙の行為を続けていたのは、ヒトではなく、オニの所業だろう。

それでも母親の言いつけをよく守っていたAさんだったが、押入れに隠れていたときに、オニどもがなにやら相談していた。オニの一人は母親だった。母親のオニの一面を見たAさんは、ついに脱出を試みる。

公園で声をかけてくれた婦人に「あんな家に戻りたくない」と泣きついた。（読者は、御伽噺（おとぎばなし）のようだ、と思ってはいけない）

◇なぜ？

やがて回復したAさんは、23歳のとき母親に一度会った。「どうして軟禁したと？」とAさんは母親に詰め寄ったが、母親は真実を語ろうとしなかった。

「全部しつけのためにやったこと」

それは自分を正当化するための、言い訳に徹していた。このとき、Aさんは初めて母親に手を上げ、泣き崩れた。

もう殴られるのは仕方がない。ヒトは成人したら、それまで不当に親に殴られていた何分の一かは、殴り返す権利があるというものだ。それが「恩返し」だろう。

Aさんの場合、生まれつきの心身に障害はなかったと考えられる。母親はAさんが障害をもっているせいにしているが、それはウソだろう。「障害があって、外に出すのが恥かしい、人に迷惑をかける」などという供述は、ほとんど言い訳だろう。障害があったと仮定しても、虐待の理由にはならない。監禁し続けてよいはずはない。

母親は「Aに障害があった」ことをすべての口実にしていたが、私は疑うというより、否定する。Aさんは健常者だったことが明らかだ。何の障害があったというのか。

その後に、低度の知的障害があったと診断されたが、便宜的なものであり、15年ほどの長期にわかって軟禁されれば、誰でも、知的能力が低いと判定されるだろう。

そのとき、Aさんは18歳とは見えない、122センチの小柄な少女だった。食事が満足に与えられていなかった証拠だろう。その後、150センチに成長できたことは、幸いだった。18歳を過ぎれば、身長の成長は止まるというのが常識だろうが、未成熟なまま、成長が止まっていたわけだろう。

今では、スマートフォンも使いこなせる、普通の女性になっている。講演会で、1時間半に渡って自分の体験を語ったとある。悲惨な経験をすれば、大きなトラウマになり、思い出すのもいやなものだから、自分の体験を客観的に語ることができるのは、一つの大きな能力だ。大勢の聴衆を前に長時間、それを語って聞かせるのは、知的能力がある程度高くなければできないことだ。

なぜ、こんな虐待をしたか、疑問が膨らむ。人前に出さず、学校へも行かせず、おそらく病院などにも行かせていない。ろくに食べ物を与えず、餓死してもおかしくないほど追い詰めた。自身の許可がなければ、何もできないようなしつけをAに行っていた。言うことを聞かなければ、傷が残るほど痛い目にあわせていた。Aをどう育てようと考えていたのか。学校に行かせなかったのは、どうしてか。自分が死ぬまで、そう

するつもりだったのだろうか。

◇仮説

母親がAを産まなければよかったと後悔していたことは確かだろう。母親にはAを憎む理由があったと考えなければならない。

私が推理した創作シナリオを示すと、Aは「不義」の子だったとする仮説だ。つまり、実の父親が別にいて、母親の夫、つまり名目上の父親にその秘密の交際がばれてしまった。おそらく、それはAさんが保育園に通っていた時のことだ。

別の男との付き合いは、母親の腐れ縁だったのかもしれない。結婚後も、既婚者の男との縁が切れず、内密に付き合っていたが、とうとう夫にばれた。強いビンタを食らった。「**バッシン**」

「そういえば、Aが受胎した時期がおかしい。手帳を見ると、オレが九州に出張してた頃じゃないか？　DNA鑑定してみろ！」

母親は、DNA鑑定など拒否するしかなかった。

「ほら、みろ、怪しいじゃないか、**バッシン**」「Bのヤローときっぱり別れると言うのなら、よしっ、離婚しないことをありがたく思え！　しかし、Aをオレが養育する義務はないぞ」

つまり、少女は父親からも冷遇されていた。結局、父親は一家の生活の面倒を見続けるが、少女に対しては、母親がいくら虐待しようと、自分の子とは思わないから、見てみぬ振りをし続けていた。

Aは父親（名目上の父親、あるいはBさん）にも手を上げる必要があるかもしれない。

③　女性理事の話が長いとぼやいた森会長

【毎日新聞朝刊 2021/2/4 社会

森喜朗会長（東京オリンピック・パラリンピック組織委員会）が、2月3日の日本オリンピック委員会（JOC）の臨時評議員会で「女性の多い会議は時間がかかる」と発言した。これは女性蔑視とも受け取られるもので、今後議論を呼ぶ可能性がある。

「女性がたくさん入っている理事会は時間がかかる。誰かが手を上げるとみんな発言したがる」、関係者の話として「発言の時間を規制しないと、なかなか終わらないので困る」、「（組織委員会の女性は）7人いるが、皆さんわきまえておられる。大きな場数を踏んでこられて、的を射た話をされる」】

【毎日新聞朝刊 2021/2/5 一面

森氏の女性蔑視発言で批判の嵐。４日に会見した森氏は、３日の日本オリンピック委員会（ＪＯＣ）の評議会で「女性の多い会議は時間がかかる」と言ったのは伝聞だ（人から聞いた話）とし、発言を撤回し陳謝した。

その発言を抜粋すると、「……これはテレビがあるからやりにくいが、女性理事４割は、これは文科省がうるさく言うんでね。女性がたくさん入っている理事会は時間がかかります。これもうちの恥を言うが、日本ラグビー協会は（女性の理事が増えたことで）今までの倍、時間がかかる。競争意識が強いから、誰か一人が手を上げて言われると、自分も言わないといけないと思うんでしょうね、それでみんな発言される。前に発言されたことに続いて、思いのままどんどんと行かれる。あまり言うと、新聞に漏れると大変だな。おれまた悪口を言ったといわれる。女性を数でも増やしていく場合は、発言の時間をある程度、規制を促しておかないと、なかなか終わらないと困ると言っておられた。誰が言ったとは言わないけど……」

その後の記者会見で、「五輪精神に反すると認めている人が組織委員会の会長として適任か」との質問には「あなたはどう思うか」と聞き返した。記者が「適任でない」と答えると、「ではそういうふうに承っておきます」と回答。】

【毎日新聞朝刊 2021/2/5 社会

田村淳さん、聖火ランナー辞退。森氏の「コロナがどうであろうと必ずやりぬく」の発言に違和感を持った。「強引に五輪をやって、誰が幸せなんだろうと感じた」】

【毎日新聞朝刊 2021/2/6 一面

森氏が女性蔑視発言をした会合に同席しながらも、とがめなかったＪＯＣ山下泰裕会長は５日になって「不適切な発言だった」と述べたが、森氏の進退について「最後まで全うしていただきたい」】

【毎日新聞朝刊 2021/2/8 風知草 森擁護の構造を問う

森は自民党最大派閥、細田派（清和会）の大長老である。この２０年、清和会出身の首相が権力をほぼ独占してきた。菅首相と五輪担当相の滑稽なほど腰の引けたコメントはその構造から生み出される。森に義理を感じている人物が政官界、メディア、スポーツ界に多い。義理があるから森をかばう。】

【毎日新聞夕刊 2021/2/10 一面

小池都知事、五輪４者会談を欠席の意向、森氏の発言を受けての表明。小池劇場再来で自民は警戒する。】

【毎日新聞朝刊 2021/2/12 一面、クローズアップ、社会
森会長辞任へ、きょう（２月１２日）表明する。謝罪後も批判続出、擁護が薄れる。追い込まれた森氏、国内外から包囲網。後任は川渕三郎氏（８４）。２０１３年９月の招致決定から、迷走続きの７年半。２０１４年１月に組織委員会発足。ＪＯＣ関係者「呪われた東京五輪になってしまう」と話す。】
【読売新聞朝刊 2021/2/13 一面、総合
森会長の後任を選ぶことに、事実上の待ったをかけたのは菅首相だった。「会長選は透明性を持って決めることが不可欠だ。後任は女性が望ましい」との考えを組織委員会に伝えた。】
【毎日新聞朝刊 2021/2/13 一面、クローズアップ、総合、社会
森会長辞任、後任に川渕氏辞退。後任に橋本聖子氏浮上。密室人事に批判。
組織委はグダグダに混迷。都職員「五輪機運下がる」、川渕氏「配慮が足りなかった」】
【毎日新聞朝刊 2021/2/16 総合
森氏の（進退に）関与せずと言っていた首相が、後任には注文を出したことは、整合性が問われる。
予算委員会の集中審議で、菅首相「決定する際にはルールに基づいて透明な形で決めてほしいと強く申し上げた」と、自身が関与したことを認めた。】
【毎日新聞朝刊 2021/3/28 社会
森元首相がまた失言。河村武雄氏のパーティで、ベテラン女性秘書について、「河村さんの部屋に大変なおばちゃんがおられる。女性というにはあまりにもお年なんですが……」】

森組織委員会会長の発言の危うさは、前々から指摘されていたことだろう。ここ来て女性を蔑視することを言ったものだから一気に批判の嵐に巻き込まれた。孤立無援の状況になった。

・五輪開催への意気込み

余談ながら、タレントの田村淳（あつし）さんが聖火ランナーを辞退したニュースが、比較的大きなニュースとして取り上げられた。辞退理由が森氏の強硬な態度に関係している。反森会長の意思表示だ。ただし、森氏は実行部隊を率いる組織委員会の会長としての立場上、「ナニが何でも開催するぞ」と言わなければ、組織が締まらないから、やむをえないところだろう。五輪開催するか、中止するかを決めるのは、森氏ではなく、もっと上位の組織、政府、ＩＯＣ、ＪＯＣ、開催都市

の首長などの判断によるものだろう。

コロナ禍が治まらないから、五輪開催には、異論がくすぶり続けている。政府や建設業界がオリンピックを名目にする公共事業として、国立競技場などを作り直したかっただけだろう。作ってしまえば、そこで競技することなど、彼らにはどうでもいいのではないか。国立競技場など何年もの間、ロクに使いもしなかったのに……。それらは今後も、ほとんど「野ざらし」になることが見込まれる。

・女性蔑視の発言

組織委員会会長は、名誉職として、森喜朗氏に与えられたものだろう。あいさつする場では、当たり障りのないことを言っていればいいところ、私見などを述べたものだから、ぴりぴりしている世相では、袋叩きになってしまった。主要な論点から外れた部分でも、揚げ足を取られ、言葉尻を捕らえまくられた。

「五輪憲章に反する」「女性差別だ」「女性蔑視だ」の批判が、世界を巻き込んで、渦巻いたから、たいへんなことになった。

２月３日の臨時評議会で、４０分話し続けたというから、相当長い。問題の「女性の話は長い」というくだりは、その中間に語られたと言う。臨時評議会で取り上げるべき話題や議題とは、関係ないことを延々と話したわけだろう。おそらく、ほとんどの人は「また会長の与太話（たわいのない、おもしろ話）が始まった……」と、ほとんどうんざりして、興味を持って聞いてはいなかったのだろう。しかし、女性たちには「引っかかる文脈」があった。同席し、話を聞いていた人たち（特に男性陣）は、口を挟んで、いさめたりすることもなかったことが、また世間の批判を浴びている。その一人、山下ＩＯＣ会長などは、いさめる機会を逸したなどと、言い訳していた。しかし、話が終わった後からでも、いさめることはできたはずだが、誰もそうしなかった。

森氏は、女性たちの発言が長いことを、自分の一つの発見として、得意げに語った。自分の話の長さを棚に置いて、「女性の話は長い」と言ったわけで、おかしさがある。自分が発見した「事実」を他人に語りたくなるのは、一つの心理的な傾向だろう。それは自分だけの見解でなく、名前は出さなかったが、ほかにもそう言う人がいると補強した。つまり、それを理由にして、女性を理事や評議員にしたくない、女性の比率を高めたくないことを主張している。たわいのない理由だ。正当な理由にはなっていないから、確かに不適

切だ。出席していた人は、ムキになって「それは違うだろう！」と言うまでもなかったようだ。それとも、森氏の主張に口を挟めない雰囲気があったのかもしれない。

森氏は、個別的な見解を述べた。森氏にとっては、〈ここだけの話〉、この場限りの与太話のつもりだったが、これがダダ漏れになった。すぐにメディアに通報され、メディアもそれに飛びついた。メディアがあげつらう展開になったのは、森氏にとって不幸なことだろう。

「女性の話は長い」ということが、女性蔑視と受け取られた。女性全般ではなく、理事になる人に限定されたとしても、女性理事にとっては、むかつくことだろう。

「わきまえている」という言葉にも、批判の矛先が向けられた。その場にいた女性たちに配慮してか、「ここに折られる女性方は、それをわまえておられる」とほめあげた。しかし、それが「それをわきまえない女はけしからんのだ」「わきまえろ！」という意味になるから、反発を招いた。

森氏が言いたかったのは「女性の理事は話が長くてかなわんね」という、ぼやきのようなつぶやきだろう。内容は、とるに足らない主張だ。女性の理事が熱心に発言することに、いや気がさしているのだろう。女性の声は、概して高音であり、高齢の森氏には聞こえづらくなっているのかもしれない。そして森氏は「他人が言うことなど、聞きたくない、興味ない」という心境になっているのだ。〈理事会など早く終えて、家に帰りたいよ〉と思っているにちがいない。自分がしゃべりたいことを言った後は、人の意見などどうでもいい、聞き流したい心境になっている。

女性たちが、森氏にとって「もうどうでもいいこと」を長々と続けることに、彼は閉口しているのだ。それらは、森氏にとって「わかりきったこと」であり、もう、言われなくてもわかっていることだったのかもしれない。それらは「建前論」であって、なんの新規性も見出せず、森氏はうんざりしていたわけだろう。彼女たちが早口でしゃべりだすと、森氏は、意味を理解するのについてゆけなくなっているとも考えられる。そんな会議を早く終えたいから、話の長い女性たちに文句を言った、と私は解析する。

高齢者にありがちなことだろう。もちろん、森氏は自分が高齢（83）であることを認めているし、老害になっているかもしれないという自覚のあることを明か

している。

一般化して、人々の能力や習性を論ずることには、反発を招く危険があるものだ。この場合、森氏が女性を一般化して「話が長い」と決め付けたことがいけない。

この発言が女性を差別しているものかどうかは、微妙なところだろう。私は、単に女性の話が長いことが女性の欠点だとは思わない。女性が劣っているという意味でもないだろう。むしろ、相手に対してわかりやすく説明しよう・説得しようとすると、どうしても言葉が増えるものであるし、思考の深さが言葉の数に表れるものだから、思考能力の優秀さを示す指針になりうる。昨今では自分の意見をしっかり言うことが求められてきているし、熱意があるから、話すものだろう。一方の、多数派の男性側は短く話すだけか、あるいは、熱意もなく、何も言わずに席を暖めている者が多いのだろう。森氏にとって、そのほうが都合がよいわけだ。

「ワシは長い話を聞くのは嫌いなんだから、みなさん、忖度してくれよ！」と森氏は言いたかったのだろう。発言の少ない理事が森氏の好みなのだが、一部の女性たちは忖度しないで、熱心にしゃべる……。

批判の声が上がったものだから、森氏は次の日（２月４日）、なだめすかすために記者会見を開いた。彼はぼそぼそと「深く反省し、その発言の取り消す」と言った。しかし、聞いている側は、それは口先だけだろう、本心の思いとは違うだろうと受け取られた。その記者会見で、森は、辞任すべきという声が上がっているとする記者の追及に、気色ばんで、不遜な態度を見せた。失言で辞職することは、屈辱的だろう。「記者のごときものに、辞任を求められたくないよ」と、むかついたのだろう。〈コノヤロー、このオレを、会長に不適格だとでもいうのか？〉

森氏はその記者に逆質問をした。これがまた、いけなかった。墓穴を掘るような、余計な逆質問だった。逆質問は、自分かはっきり答えたくないときに用いる、一種の「はぐらかしの術」だ

森氏は、その逆質問に対してはっきりと答えないだろうという「甘い考え」があったようだ。〈このオレに、記者ごときの若造が、面と向かって「会長にふさわしくない」などは答えないだろう。このオレに意見するのは〈１０年早いんだよ〉とでも思っていたわけだ。一昔前（ひとむかし）の記者なら、確かに、言葉を濁したかもしれない。

「記者など、取材するのが仕事であり、自分の意見を言わないし、記事に出さない」と思い込んでいた節がある。ところが、この記者は、意表をつくように、森氏の質問に、深く考えもしないで、即座に答えてしまった。自分の意見をはっきり言う、現代的な若者だった。

記者「辞任する意向はありませんか？　組織委員会の会長としてふさわしくないという声があります」

森「キミはどう思うかね？」

記者「ふさわしくないと思います」

森氏はムッとした表情を浮かべて、「承っておこう」と述べ、会見を打ち切った。捨て台詞のように「おもしろおかしく書こうとしているんだろ」

このとき、森氏はあきらかに立腹した態度を見せたものだから、この映像を見た人々の印象を悪くした。彼らは「コノヤロー、反省していないな」「傲慢だ！」と思ってしまう。

結局、森氏は謝罪して前言を撤回したのに、世論の多くは「**謝罪になっていない**！」と、さらに怒りまくり、批判を強めた。非難の嵐だ。日本社会の不寛容性が、あらわになる。失言をみんながネチネチと攻撃するようになっている。森氏を庇(かば)おうとする一部の人々にも批判の矛先を向けるものだから、ついには「不適切な発言だ」の大合唱になる。「世界からやってくる女性アスリートがどう思うか。日本の恥だ」「日本のイメージを悪化させる」という人も現れる。

森発言に反発して、運営のボランティアを辞退するする人が続々と現れ、聖火リレーランナーを辞退すると言い出す人も出てきた。

２月１０日、小池都知事が五輪４者会談に欠席の意向を示した。森氏は都知事が女性であることを忘れていたようだ。これでは五輪の開催がますます危ぶまれるから、森氏にとって大きな圧力になったことだろう。

森氏が辞めないと、もう収まりがつかなくなった。

２月１１日、「不適切発言！」「五輪組織委員会の会長不適任！」の一斉コール、大合唱が世界中で沸き起こり、さすがの森氏も心が折れて、とうとう辞任に傾いた。森氏は会長としての最後の仕事を後任を決めることだと考えた。「オレがだれかを推薦しなければ、組織委員会がゴタゴタしてしまい、五輪の開催に支障を来たす」という危機感があったのだろう。大学の先輩でもあり旧友でもあり、スポーツ界のまとめ役として豪腕を振るってきた川淵三郎氏に泣きついた。

「余計なことを言ってしまった。オレはもうあかん、グスン。キミがオレの後任としてやってくれよ、オレのためというより東京五輪のために、頼むよ。キミ以外に適任者はおらんよ」

川淵氏は、偉大だった友人に頭を下げられたから、しぶしぶながらも引き受けた。

川淵氏ならば、組織委員会の会長として勤めを果たせるだろう、と私も考える。引継ぎもスムーズに行われそうだ。パラリンピックが終わる9月まで、勤めればよい。川淵氏が高齢（84）であることを除けば、森氏が推薦した人事に文句を言う者はいないだろうと思われた。

ところが、川淵氏が会長の公認を承諾したというニュースが広まると、首相官邸で、すぐさま異論が出た。菅義偉首相が、その人事に待ったをかけた。それまで彼は、組織委員会は政府とは別組織だから、森の辞任については関与しないと言っていたが、ここで口を挟んだ。「不透明な後任人事はいかん。後任は女性が望ましい」

菅氏は〈このとき、組織委員会に強く申し入れた〉と、その後に国会でただされたときに、彼自身が証言した。

私が彼が言いたかったことを補足すると、「首相のオレが決めるのならともかく、森一人で決めたような人事は、オレが認めん。へまをしでかして去りゆく者に、後任を決める権限はないんだよ！ **勝手に決めるな！**」

菅氏は、官僚人事においても省庁の事務次官などのトップが後任を指名する慣習を快く思っていなかったという。人事に関して、人一倍神経を使う人であることは知られている。森氏が実質的に後任を一人で決めたことに、怒りの感情さえ覚えたということだろう。彼は〈人事管理は、他人にやらせない、オレがやるのだ〉と考えている節がある。組織を掌握するためには、そのトップの人事を司ることが一番近道であることを知っている。

首相官邸からの圧力は絶大だった。「オレに逆らうヤツは左遷だ！」と公言している菅氏だから、だれもがあわてたことだろう。その日のうちに、森氏の「推薦」が白紙に戻され、川淵氏の会長就任は、ありえないことになってしまった。川淵氏は、強烈なダメ出しを受け、辞退を迫られたわけだろう。つまり。人物としての問題ではなく、プロセスの問題だから、川淵氏も納得したことだろう。「オレは、森に泣きつかれたから、やむなく引き受けることにしたんだし、横槍が

入るなら、すぐに降りるよ」

２月１２日、森氏は辞任表明した。その言葉には悔しさがにじみ出ていた。後顧の憂いなく、辞められると思っていたのに、後任者が未定になってしまったから、不満がふくらむ会見になった。森氏の面目丸つぶれの図になった。

「透明性を欠く」という理由で、ひっくり返されたのに、急遽設置された「候補者検討委員会」では。選出されたメンバー８人が誰なのかが公表されず、話し合われた議論も候補者の評価基準・評価ポイントも、一切秘密にされての「密室選考」だから、まったく不透明なプロセスだ。不合理なこと、おびただしい。

結局、橋本聖子・五輪相が、形だけの選考委員会で候補者として一本化され、会長に納まった。菅氏の意向が反映された人事になった。現職の大臣を会長にする発想は、総理大臣でしかできない。事実上、菅氏が独断で決めた人事たった。それを表に出さなかったことが巧妙だ。

重鎮・森氏のメンツをつぶした菅首相は、短期政権になる可能性が出てきた。

④ 五輪開会式典で渡辺直美をブタにする演出

【毎日新聞朝刊 2021/3/18 社会
昨年３月に佐々木宏氏が渡辺直美さんを侮辱する演出を五輪開会式で提案したことを、週刊誌が報道した。】

【毎日新聞夕刊 2021/3/18 一面
五輪式典総括者・佐々木宏氏が辞意。渡辺直美さんをブタにする演出案を出したことで謝罪した。「大変な侮辱になる」】

【毎日新聞夕刊 2021/3/21 社説
五輪関係者と人権。容姿で人をからかう行為はルッキズムと呼ばれ、差別に当たる。佐々木氏「私が調子に乗って出したアイデアです」
演出チーム内ではトップの立場をめぐる不協和音もささやかれていた。昨年１２月にチームは解散し、代わって佐々木氏が就任した経緯がある。】

【毎日新聞朝刊 2021/3/25 広告・週刊文春４月１日号
（総統括者の交代の）黒幕は電通Ｎｏ．２、女性演出家ＭＩＫＩＫＯ氏を排除し、入社動機を責任者に据えた。】

五輪式典での演出は、日本の一流どころの人を集めて構成したものだ。それぞれ一流だから、自分の提案がダメ出しされ、通らないことに感情的なわだかまりが生じてしまい、ギクシャクしていたことが想像される。

演出チーム（メンバー7人）内でトップの立場をめぐる不協和音とは、だれがリーダーシップを取るか、取るべきか、ということで、もめたと理解する。総統括者の野村万斎を否定する空気が流れたのだろう。結局、その野村万斎氏が降りることで、佐々木氏がトップにおどり上がったわけだ。佐々木氏が野村氏を追い落とした形だ。

昨年12月、その交代を発表する記者会見で、野村万斎氏は、佐々木宏氏に「面白おかしく、自由にやってくれ」という趣旨のことを発言した。それが、佐々木氏をさらに調子に乗せることになった、と私は考える。野村氏には、自分の思いどうりにやれずに身を引くことになった無念さと、なげやり的なサッパリ感があったようにみえた。それは意に反する降板であったことは明らかだ。

振付師のＭＩＫＩＫＯさんも、不協和音のなかで、惜しまれながら身を引いた一人だろう。渡辺直美さんはＭＩＫＩＫＯさんの演出を評価していた一人だ。佐々木宏氏の体制になって、はじかれてしまった感がある。

つまり、この演出チームは、それぞれの分野で自分の思うようにやってきた成功体験とプライドのある人の集まりであり、他の人からの「ダメ出し」にあうと、人一倍気まずい思いを抱くことだろう。どうしても、自分の考えた案を押し通そうとする。そんな寄せ集められたような演出チームでは、各自の案が対立し、意見がまとまらない状況に陥りやすい。なんとかそれをまとめていたのが野村氏だろう。

問題となった佐々木氏の「渡辺直美をブタに見立てる」案。佐々木氏が考えたことを想像すると、〈オリンピックをもじってオリンピッグ。しゃれてるね。ブタと言えば、渡辺直美だろう。あいつをブタにしてスタジアムの真ん中に登場させたらおもろい。へへへ、妙案じゃないか。まじめくさった式典に、少しはおもしろみを加えないとね〉

それはコミカルな演出だろうし、たわいのない余興のようでもある。渡辺直美は太っていることを売りにしているタレントだから、それなりに、楽しい見ものになったかもしれない。

テレビのバラエティ番組で、お笑い芸人が芸として演じてみせるのならば、コントとして成立しそうだが、オリンピックの晴れの舞台で、それをやるのは、ふざけすぎているということだろう。

主に女性メンバーから反対意見が出た。太った女性をからかうことになるから、容姿を気にする人にとっては、たまらない。そんな行為に対してルッキズム（ｌｏｏｋｉｓｍ）という新しい言葉が使われている。それはもう滑稽というより、欠点や弱点をあげつらうことで侮辱とみなされる。

反対意見が出たとしても、押し通す実力が佐々木氏にはあったが、統括責任者の野村氏が決断し、却下するならば、それに従わざるを得なかったと推測される。

佐々木氏〈オレの妙案が却下されたとは……。オレが統括責任者だったら、押し通した〉と心の中で思ったことだろう。

電通に入社し立てのころはともかく、自分の提案がボツになった経験など久しくなかったと思われる佐々木氏だから、自負の心が揺れ動いたにちがいない。

〈よし、野村を落としてやろう。そしてオレが統括責任者になってやる！　統括責任者なら、誰にも文句を言わせない〉と思い立ち、組織委員会の幹部を動かして、結局それを実現したわけだろう。佐々木氏には企画力だけでなく、そんな政治力もある（人脈がある）人だ。

野村万斎氏は引き受けた仕事を途中で放り出す人ではないし、五輪の開催が延期されたとはいえ、式典の総統括者の交代は、よほどの圧力がなければ、実現できないことだろう。佐々木氏を推す業界が動き出し（佐々木氏は電通出身者。電通は政権・省庁とのつながりが強い企業のひとつ）、さらには組織委員会トップ（当時、森喜朗会長）の意向が働いたと考えるべきだろう。結局、組織委員会内部での不明瞭な手続きにより、その交代が実現した。公的発表では、その理由をコロナ禍のせいにしているようなものだった。

しかし、今年3月になって、佐々木氏も落とされることになった。演出チーム内のあつれきが続いていたのだろう。佐々木氏は、それまで築いてきた野村万斎氏の流儀を踏襲せず、奇をてらうような自己流の路線に固執したとみえる。内部事情を知る人が、そんな佐々木を撃ち落すためには「週刊誌のペンによる武力行使（文春砲）に頼るしかない」と考えたのだろう。

「渡辺直美をブタに見立てた」演出案が、週刊誌にもれた。かくして文春砲の炸裂によって、佐々木氏は辞

めざるを得なくなった。すでに却下された提案だから、解決済みの、取るに足らないことなのだが、大げさに書き立てるのが週刊誌の得意とするところだ（正論だけれど）。

週刊誌にもれた経緯は定かではないが、〈オレ流路線の佐々木が統括責任者では、やっていけない〉と考えた演出メンバーの一人が、一年前のことを暴露した可能性が高い。足の引っ張り合いが、本番の式典よりおもしろかったりして。

⑤ フェイクプラカード「電気は要らない」

【毎日新聞朝刊 2021/2/3 総合・社会〔ファクトチェック〕

ノーベル文学賞作家の大江健三郎さんがタクシーの中から笑顔で「電気はいらない！」のプラカードを掲げる画像がネットに載った。実際に大江さんが掲げていたのは「原発はいらない！」と書かれたもので、電気の部分だけが合成された虚偽の画像だ。問題の画像は、1月12日ツイッター上で匿名アカウントから発信され、一時は約4800件のリツイートと、1・8万の「いいね」がついた。結局、このツイートは削除されたが、転載された画像は今もネット上にあちこちに残っている。同じ画像が2012年ごろからSNS上でたびたび拡散されており、今回拡散された画像もそれを転用した可能性が高い。

上がフェイクで、下がオリジナル

この画像は、一目で合成とは判断しにくい、技術的に巧妙に作られたものだ。ある会社の公式ブログには「こんな幼稚なうそをつくから、私は大江文学は読まない」と、合成とは知らなかったと思われる社長のコメントを載せている。

オリジナルの「原発はいらない！」と書かれたプラカー

ドの画像は、２０１１年９月１９日に東京都内で開かれた脱原発集会の様子を報じた記事とともに同２６日に配信された。

〔さようなら原発１０００万人アクション〕の井上さん「やり方が姑息だと思います。昔から原発推進側からは『原発がいやなら電気を使うな』と言われてきました」】

前掲した記事は、記者がよく取材し、鋭く指摘したものであり、私には好感が持てる。

「電気はいらない！」とする写真は、パロディ作品に似ているのだが、パロディがもつ芸術性などまったくない。大江健三郎さんの主張する「文言」を別なものにすり替えるのは、反則行為そのものだ。悪意のある改変だ。こんなことをしては情報発信者として失格だろう。即、退場させなければならない。これをフェイクだと知らずに引用し、さらに拡散させた人も、責任が問われる。

「原発」を「電気」に置き換えることで、別の意味に逆転させてしまっている。大江健三郎さんをからかっている。冷笑的でもあり、おかしさがあるのだが、二つの写真を比べてみると、すぐに、その写真掲載者の悪意に気づかされる。他人が発進したメッセージを捻じ曲げている。からかわれた大江健三郎さんはこれを見て怒り心頭だろう。「オレは、そんなこと言ってないぞ！」

この写真を見た人は「電気はいらないなんて、冗談だろう。へらへら顔が笑っているし……。あいつは○○か？」と思うだろう。

たしかに「電気はいらない！」という主張はおかしい。見識が疑われるところだ。よく考えれば、へんだと思える。しかし、この写真を突きつけられれば、「大江さんがそう言った」と多くの人は信じてしまう。「こんなことを言うヤツなら、大江の作品はもう読まない！」と公言する人も出てくるほどだ。

この大江さんの笑いを私がコメントすると、これは支援者たちに向けた愛想笑（あいそわら）いであって、冗談で笑っているわけではない。はにかみもあったかもしれない。

これは「でっち上げ」という表現がぴったりだ。加工した写真を公開した者は、人々を意図的に誤解させている（ミスリードする）。フェイクであると簡単には見破れない加工を施していることに、私には悪意が感じられる。彼の正体は不明だから、仮にＸ氏としよう。Ｘは大江さんに「原発はいらない！」というプラ

カードを掲げられて、むっとしたのだろう。〈余計なことに口を挟むヤツだ！〉

そんな感情で、頭を働かせ、悪意のある「虚偽写真」を思いついた。〈プラカードの中の原発を電気に置き換えたら、おもしろいじゃないか。へへへ〉

Ｘは原発推進派の一人だと推定されよう。原発を反対されたものだから、悪質ないたずら心で改変したに違いない。２０１２年ごろに巧妙に作成したものとされているが、今でも拡散しているというから、感染力が強い変異ウイルスのようなものだ。

彼らが「原発が要らないというなら、電気を使うな！」と、日頃から反対派を恫喝していることが、証言されている。これを言い換えれば、「テメーらが電気をたくさん使うから、原発が必要なんだ！」ということだろう。

東京電力が福島で原発の大事故を起こして以来（自然災害と人為的なミスが重なった）、原発推進派は逆風に立たされている。そのいらだちがあるから「でっち上げたくもなる」のだろう。

原発の利点を重視する人は、〈原発を差別してほしくない〉と思うだろうけれど、原発以外に有力な発電方法はいくつかあるわけで、エネルギーを原発に頼ることに危機感を持つ人は多くなってきている。両者は価値観の相違といえる。

それが好き嫌いというより、もっと科学的・分析的な方法で判別すべきものだ。原発には常に事故の危険性があり、さらに、何年かかるかわからないような放射性廃棄物処理の問題が未解決だ。それらが大きな減点ポイントだろう。経済的に、原発は発電コストが安いといわれてきたが、総合的には高くつくことがわかってきた。また、理想的とされた核燃料サイクルの構想も、日本では巨額な資金を投じているのに、挫折している状況だろう。

⑥　黒染め強要訴訟

【毎日新聞朝刊 2021/2/17 社会
髪の黒染め強要訴訟、大阪地裁は頭髪指導は「妥当」とした。「非行を防ぐ正当な目的のため、社会通念に合理的」「女性の地毛を黒色だと認識していた」】
【毎日新聞夕刊 2021/3/28 社会
東京都立高校の約４５％が、生まれつき髪が黒いかくせ毛のある生徒に「地毛証明書」の提出を求めている。一定の書式で保護者の署名、印をする欄がある。都教

育委員会は「事実誤認」による指導を防ぐため」とする。証明書に署名、捺印した生徒の父親は、「黒髪、直毛以外は認めない考えがそもそもおかしい」と語る。都教委は3月中旬、各校に証明書のあり方の見直しを求める通知を出した。証明書を提出させる際の留意点として、「真に必要かを判断し、必要な場合はその説明責任を果たす」とし、幼少期や小中学校時代の写真の添付も原則、中止とするよう要請した。

都教委「黒髪であることを原則とする指導は社会の中で認められるものではなく、地毛証明も見直しが必要だと判断した。地毛の申告は人権に関わるもので、必要性をきちんと生徒、保護者に説明できるものでなければならない」【

髪を黒く染めることを学校側に強制されたとして、元生徒の女性が学校を訴えた裁判だったが、その主張は認められなかった。これは不当判決だろう。裁判官は「茶髪は不良だ。茶髪生徒は非行に走る」ということが社会通念だとしたが、それは通念ではなく偏見というものだろう。頭髪指導が非行を防ぐことになるわけがない。

茶髪なら、街を歩けば、普通に見かけるヘアスタイルであり、多彩な色の髪にあふれている。若くして白髪になる人も珍しくない。男女を問わず、特に若い人に多い。学校側は、彼らをみな不良青年・不良中年と決め付けているのだろうか。

そもそも、学校側が生徒に厳しく頭髪の染色を禁止していることが「元凶」になっている。頭髪指導は、まだなくならない。学校側は、生徒がルール（校則）に従わないとして、ムキになって指導しているところがある。その必要性が本当にあるのだろうか。生徒のために指導していることだろうか。

教師が、誤った認識で、生徒の言うことをまるで信用せずに、しつこく恫喝的な指導を行ったことにより、学校生活が難しくなるほど悩まされ続けた生徒の言い分に、裁判官は耳を傾けなかったことになる。「非行を防ぐ正当な目的のため」なら、黒染めにした指導は許されると説明したが、生徒を悩ますような指導をしたことは、やり過ぎだろう。

指導教師は、女性の地毛を黒色だと認識したことで、大きな間違いをしている。前提となるべき基本的な認識を誤ったのだから、その後の指導方法はすべて間違いになり、正当性を失うものだ。「女性の地毛を黒色だと認識していた」という主張など、本来、言い訳に

もならないことだ。しかし、裁判官は、その認識ならば、頭髪指導をしてもよいと結論付けた。その指導方法が違法とは言えない、などとした。これでは、刑事事件の「冤罪」に相当する。

女性が何度も「これは地毛だ、茶色に染めていない！」と言い張っても、ムダだった。教師が生徒を信用しなかったことに、信頼関係を大きく損なうものだ。地毛が茶色であることを確認する方法として、保護者に電話でもして確認すれば簡単だろう。しかし、学校側は、保護者の話など信用しない。一筆書かせる。数年前の写真添付の「地毛証明書」の提出を求める。

女性も、教師から黒染めを強要されていることを泣きながら親に訴えたはずだ。親が教師に連絡をとり、「この子の地毛は茶色です。生まれたときから、この色です。何も染めてはいません」と訴えしても、信じてもらえなかったわけだ。

教師「親も子もウソをついていんだ！」

彼は「絶対、茶色に染めている！」と思い込んでいたことになる。そこまで、思い込みが激しい人物だったのだろうか。

黒く染めたとしても、数日もすれば、生え際が茶色になるから、茶色を黒く染めたことがわかりそうなものだ。つまり、地下が茶色であることは、容易にわかるはずだ。確かな証言があり、実際の頭髪を見れば、地毛を黒色だと認識し続けるのは、逆に難しいことだ。

生徒が髪を黒くした数日後、生え際が伽色になっていることを発見した教師は、

「おい、また生え際を染めやがったな！　染色を落としこい！　また染めたら、許さん」と、怒鳴りまくっ足りして……。

私が推理すると、この教師はこの生徒の地毛が茶色であることを知っていた、と考えられる、しかし、法廷では、自分の指導（黒く染めさせたこと）を正当化するために、「女性の地毛を黒色だと認識していた」と言い張っていた可能性が高い。〈だから、指導したのだ〉という理屈だ。

学校側としては、不当な指導をしたことを認めたくないから、この教師に口裏を合わせ、法廷の場で証人に立ち、「私も女性の地毛を黒色だと認識していた」として、教師の主張を補強したのだろう。そんな複数の証言があれば、裁判官はすっかりごまかされてしまう。

学校側は「茶髪の生徒がいると、世間体が悪い。学

校の格式が下がってしまう」と思い込んでいるから、茶髪をなくしたい。学校の体面を保つのが動機であり、生徒のためを思って指導したわけではない。茶髪を「学校の恥」とでも思っているのだろう。たとえ、それが地毛であろうと、一律に黒髪に揃えたい。例外的な生徒がいれば、指導せずにはいられないのだ。多様性を嫌ったことになる。

判決を聞いて無罪放免となった教師は、「裁判官をうまくごまかしてやったよ。へへへ」と舌を出したことだろう。

今年の3月になって、ようやく都教育委員会が動いた。「地毛証明が必要だと保護者に説明すること」を学校側に求めている。学校側は〈茶髪がいると、学校の評判が落ちるから〉という真の理由を生徒・保護者に説明したらいい。

⑦ 黒人の命は２７００万ドル

【毎日新聞夕刊 2021/3/13 社会
ミネアポリス黒人暴行死、遺族に２７００万ドルの支払いで和解へ。黒人は偽札を使った疑いで取り押さえられた際に、警官にひざで首を圧迫された。】

アメリカ・ミネソタ州のミネアポリス市で、白人警官による黒人圧死事件があった。その続報だ。

２７００万ドルで和解が成立する前の交渉中には、遺族側がそれ以上の金額を吹っかけたに違いない。

「コノヤローども、黒人の命を安く見積もろうなら、ただではおかない。デモ隊を編成して市役所に押しかけるぞ！　オレたちゃ、怒ってるんだ！　一部が暴徒化しても、知らんぞ！」

この和解金額を考えると、一方的な交渉になったことが伺われる。ミネアポリス市は、もう平謝りに徹しざるを得なかった……。補償としては法外な金額で妥結している。黒人たちの怒りを静めるための「謝罪をこめた金額」と解釈すべきなのだろう。だいたい、こういう金額は公表すべきものではないのだが……。

遺族側は、２７００万ドルのうちの５０万ドルを寄付すると言い出して、気前のよいところを見せている。市から分捕った２７００万ドルを中での、分け前というところだろう。でも、それは全額の２％にも満たないから、「気持ちだけ」の金額にすぎない。

この事件は、偽札使いを疑われた黒人が、白人警官たちに取り押さえられ、地面にはいつくばった状態で、

一人の警官にひざで首を圧迫され、死に至った事件だ。その様子が動画に取られたものだから、衝撃的に全世界に知られた。「Black lives matter（黒人の命は大切だ）運動」のきっかけになった。

彼は、白人警官の言動に異を唱え、率直に従わなかったために、這い蹲わされたという状況があった。彼が警官におとなしく従っていたら、どうだったか。

アメリカでは、白人警官が黒人を殺したならば、デモ隊が編成されるなどの、大騒ぎになることが常態化している。このケースでは、ミネアポリス市にとどまらず、騒ぎが全米に広がったものだから、特に大きかった。バスケットボールやテニスの黒人アスリートたちも、そのコートに持ち込んで抗議の姿勢を示し、騒ぎの輪を広げた。

ミネアポリス市の役人たちは、ビビリまくり、２７００万ドルで手を打つことにした。しかし、この金額は常軌を逸しているだろう。お金の価値が下落したかのようだ。もっと妥当な金額で決着させるべきではなかったか。裁判という公的な場で裁定してもらうべきだったと思われるが、市としては交渉を長引かせたくなかったなどの事情があったのだろう。４名の警官が刑事告訴されたから、所属したミネアポリス市がその責任を負った形になったにせよ、完全に黒人たちの圧力に屈したことになる。２７００万ドルは、市民から集めた公金だろう。本来は市民のために使うべき金だ。実質的に市民が賠償金を出したことになる。

２７００万ドルとは、どういう計算で出されたものだろうか。遺族が今後生活するための補償としては、十分すぎる。これがアメリカンドリームなのだろうか。

遺族が、これだけの金を手にしたことで、やっかむ人も多くいることだろう。特に白人層の反発を買い、白人対黒人のミゾが深まることはあっても、埋まりそうにない。私には、白人たちの呟（つぶや）きが聞こえてくる。

「貪欲なヤローどもめ！　テメーだけが被害者ぶりやがって。そのカネで、働きもせず贅沢三昧の暮らしをしたら、承知せん！」

⑧　アメリカではアジア系の人々が暴行される

【週刊文春 2021/3/18号、町山智浩の言霊ＵＳＡ

１月２８日、サンフランシスコでタイ系の人（84）が正面から突き飛ばされ死亡、１月３１日、オークランドのチャイナタウンを歩いていた中国系の人（91）が

背後から突き飛ばされて重症、ニューヨークの地下鉄で、フィリピン系の男性（61）がカッターナイフで顔を切り裂かれた。】

【読売新聞朝刊 2021/3/18 国際

米アトランタ周辺のマッサージ店3店で銃撃があり、8人射殺された、うち6人はアジア系。警察は容疑の白人を拘束した。】

【毎日新聞朝刊 2021/3/19 国際

米、アジア系社会不安、ヘイトクライム多発、いきなり暴力をふるわれる。「お前たちがコロナを持ち込んだ」と叫ばれ、唾を吹きかけられた。】

【毎日新聞朝刊 2021/3/21 国際

バイデン氏は銃撃事件を受け、演説、「アジア系差別根絶を」

アジア系米国人へのヘイトクライムが急増している。】

【毎日新聞朝刊 2021/4/1 国際

ニューヨークで、アジア系女性65歳が歩道上で蹴り倒され、骨盤骨折などの重傷を負った。歩いていた女性が前から来た黒人男性にいきなり腹部を蹴られ、倒れこんだところ、頭を数回蹴られた。ビルの内側からそれを見ていたビル管理人はドアを閉めた。】

【読売新聞朝刊 2021/4/7 国際

米でアジア系へ暴力が続く。加害者の一人「お前はここにいるべき人間じゃない！」

米アジア系人権団体によると、全米で人種差別の被害にあったとの報告は、2月末までに1年間で３７００件あった。】

アジア系の人が襲われる事件がアメリカで頻発している。私はアジアに住むモンゴロイドの一人として納得いかないことだ。一件二件の単発事件でなく、一年に数千件起きたと数えられているのがら、群発であり、たいへんなことだ。それに対し、アジア系は比較的おとなしく、声を上げる人が少ないと言われている。でも、おとなしい人ばかりではないだろう。

アメリカでは、差別によってデモの集団が暴徒化した場合、商店が狙われ、略奪や破壊が行われる例が、歴史的に多数ある。被害が大きかったのは韓国系や中国系の店であったりする。単に「とばっちりを受けた」のではなく、「意図的なねらわれた」と考えるべきだ。アジア系に対する差別は今に始まったことではないけれど、コロナ禍の状況下で、いっそう目立ってきた。

暴行の一部始終を捕らえた映像がいくつか公開されている。［歩道を歩く質素な女性に対し、近寄った壮

健な男がいきなり、腹にけりを入れた。倒れこんだ女性を殴る蹴る、頭を地面に叩きつけるの暴行を働き、去ってゆく……」

これはすさまじい。暴行された理由は？　それは彼女がアジア人だったから……。

信じられない理由で、暴行している。街中で、すぐばれるような状況で、見知らぬアジア系の小柄な人に、いきなり突き飛ばし、殴る蹴る、つばを吹きかける、ののしりまくる……。

彼らは、自分が凶悪犯罪者として、警察に逮捕され、刑務所に送られることなど意に介さないかのようだ。暴行したい理由はそれぞれあるにしても、「アジア人が新型コロナウイルスを持ち込んだ。彼女はアジア人だ。ならば、暴行してやれ」という論法だ。

「中国がウイルスを拡散させた」とは、前大統領のトランプが吹聴していたセリフだ。トランプがヘイトをあおった感がある。

暴行した男たちは、黒人だったり白人だったりで、人種に関係しない。差別に対して敏感と思われる黒人でさえも、アジア系の人を差別することに、私は「どうしようもないもの」を感じる。

黒人などは白人から差別される経験をして、差別されることの苦悩をよく知っているはずだが……。そういう人がアジア人を差別するのは、不条理なことだ。黒人がアジア系の人を差別するなら、差別に抗議するデモを行うのは、おこがましい。〈身勝手なものだ〉と私は思ってしまう。もちろん、人種をひとまとめにして、その人々を同一視することはできないけれど、人種間に隔たりがあり、誰でもその一つのグループに属するから、他の集団に対して差別感情を本能的にもつものらしい。

社会生活するうえで、それを行動に出してしまうことがまずい。アジア系というだけで、道を歩く人を暴行したりするのは、とんでもない暴挙というべきだろう。モラルも、マナーも、分別もあったものではない。暴行するのは、社会人としての自覚が欠如している人たちだ。それは人種に関係ないのだろうけど。

⑨　中国政府のウイグル族いじめ

【毎日新聞朝刊 2013/11/21 オピニオン
天安門車突入事件とウイグル族。踏みにじられる辺境。】

【毎日新聞朝刊 2013/3/16 国際

中国、雲南省昆明市の昆明駅で、約１０人の武装グループが駅利用客らを次々に切りつけた。死者は２９人。昆明市当局は新疆ウイグル自治区の独立派の「計画的で組織的な暴力テロ事件だ」と断定した。】

【毎日新聞夕刊 2014/1/9 一面

スペイン裁判所が、チベットでの虐殺関与容疑で江沢民氏の国際手配を要請した。】

【毎日新聞朝刊 2014/9/20 総合

スコットランド住民投票、中国は新疆ウイグルやチベットで独立を求める機運が高まる事態を懸念している模様だ。日本在住の亡命ウイグル人「中国では民族独立を主張すれば罪になる。住民が投票できるスコットランドがうらやましい」】

【毎日新聞朝刊 2015/1/15 国際

中国、シリアを目指す?ウイグル族を拘束した。偽造パスポートで海外に密出国を図ったとする。】

【毎日新聞朝刊 2015/1/20 国際

中国公安がウイグル族ら１０００人超を検挙した。新疆ウイグル自治区では、若者がヒゲを伸ばすことや女性がスカーフで顔を覆うことが禁止されるなど、イスラム教を信仰するウイグル族の宗教的な習慣を否定する政策がとられ、反発するものは取締りの対象になってきた。抑圧を逃れるために国外脱出を望むウイグル族も多い。摘発された人の中には亡命を図ったケースもありそうだ。】

【毎日新聞朝刊 2015/2/22 ストーリー

ウイグル族の脱出が相次ぐ。イスラム族抑圧が政府による強まる。中国政府は、ウイグル族が過激組織に参加していると主張。】

【毎日新聞朝刊 2019/11/18 国際

ＮＹタイムズが入手したという中国文書によると、週主席がウイグル弾圧を指示、「容赦するな」

ウイグル人を多数収容している「職業技能教育訓練センター」には監視塔があり、高いフェンスで囲まれている。】

【毎日新聞夕刊 2020/7/2 総合

米税関、新疆発の毛髪製かつらを押収。１３トン、強制収容所で製造された疑いがある。】

【毎日新聞朝刊 2021/2/8 国際

中国政府は、新疆施設での暴行を否定した。欧州が批判している。】

【毎日新聞夕刊 2021/2/12 総合

中国がＢＢＣの国内放映を禁止した。英国のメディア規制当局が今月４日に中国国営メディアの放送免許の

取り消しを発表したことや、ＢＢＣのウイグル問題に関する報道に対する報復措置とみられる。】

【毎日新聞夕刊 2021/1/12 総合

中国、ウイグル自治区で少数民族ウイグル族などを不妊手術を事実上強制しているとして、欧米で問題視している。中国側（中国大使館）は、生殖政策で女性が管理されているという表現でこれを正当化するツイッターが投稿されていたが、ツイッターが削除。女性が自信と自立を保て、「子どもを産む機械」でなくなったとしていた。】

【毎日新聞夕刊 2021/1/20 一面

米、ウイグルの弾圧について「大量虐殺」を認定。】

【毎日新聞朝刊 2021/4/1 国際

米、ウイグルでの人権侵害をジェノサイドと２０２０年版の人権報告書に明示した。国際法上、ジェノサイドは人種や民族、宗教の集団を破壊する意図で行われる行為をさす。殺害だけでなく肉体的精神的に重大な危害を加えることなどを含む。報告書はウイグル自治区での強制収容所での１００万人以上の拘束や強制的な不妊手術・中絶、拷問や強制労働などを挙げた。さらに２００万人に「再教育」訓練が実施されたことを指摘した。】

【読売新聞朝刊 2021/4/3 国際

中国、ウイグル宣伝を急増させている。強権的な統治を正当化する記録映画など。職業訓練施設を卒業したウイグル族が「幸せに暮らしている」と語る。】

◇概要

これは、先に書いた『収容所で再教育されるウイグル族』の続編だ。中国政府によるウイグル族いじめが続く。ただし、引用した記事の一部は数年前のもので古いが、以前から状況が続いていることを示している。ますます状況が悪化している現状がある。

この時期（２０２１年３月）中国政府によるウイグル人の弾圧が本格化している。中国政府はウイグル族を徹底的に「じゃまもの扱い」している。民族差別である。欧米各国は、これをジェノサイド（集団的虐殺の意）と表現し、口をそろえて中国政府を非難する流れになっている。

しかし中国政府、欧米からの批判を「内政干渉だ」として逆切れしている。「彼らは根拠がなく、ウソばっかり言っている」と、たけだけしい。

なお、ウイグルに関して日本政府は欧米と口をそろえず、静観している状態だ。自国の利益が左右するよ

うなことでないと動かない、たとえば尖閣諸島の領有権の方が喫緊の課題らしい。ウイグルで文句をつけると、何らかの対抗措置がとられるのが怖いのだろう。

中国政府がウイグルに対して、実施しているのは、主に以下のことだ。

・政治的統治

自治政府の主要ポストに中央政府によって任ぜられた漢民族を据えている。自治区とは名ばかりだ。民意など、まったく無視。

・監視体制の徹底

街中のそこら中に監視カメラを置き、見張っている。個人の行動を記録している。人々が集まることを警戒する。警官を配置に就けている。

・強制収容

政府の意に従わないものは、収容所に送り込む。収容所で反抗的態度を見せようものなら、みせしめに体罰を徹底的に行うか虐待する、あるいは刑務所に移す。女性なら、所員たちが性的暴行を加える。

・宗教弾圧

イスラム教の信仰を捨てさせる。彼らにとって神聖なる礼拝所のモスクなど徹底的に破壊する。それらは廃墟になっている。モスクの破壊など、イスラム教徒にとっては、絶対許せない暴挙だろうが、中国政府はあえてやってしまう。

・人口抑制

かつて中国全体で「一人っ子政策」があったが、ウイグル自治区では実質的に継続中だ。違反しようものなら、女性たちに強制的に不妊手術・堕胎を施す。そもそも、収容所内にいれば、妊娠が許可されるはずがない。

・行動の束縛

移動を制限する。外国に脱出することもできない。伝統的行事も宗教的とみなされ、禁止。経済活動や職種も制限される。従って貧しい生活に追い込まれている。

・思想教育

「習思想」を徹底的に植えつける。毎日暗唱させられる。かれらはもうウイグル語でしゃべることもできない。逆らう者はみせしめにされる。

◇思想・教義・信条

中国政府がこれを読めば、一つ一つ否定するだろうが、それらは根拠のないことではない。必死になって世界に情報発信するウイグル人がいるし、各国の記者

の目があり、宇宙にも人工衛星からの目がある。１００％正確ではないにしろ、十分な確かさがある。モクスの破壊など、宇宙から見れば、すぐにわかる。

中国政府は宗教を嫌う。宗教は共産党とは相容れない。共産党独裁のためには宗教を排除したい。特に、イスラム教は過激な宗教だとみなしている。イスラム教を信じるウイグル人は、排除しなければならないと考えている。思想教育に力を入れることになる。イスラム教を熱心に信じると、過激な行動を起こすと思われているから、余計に目をつけられる。ウイグル人が海外の武装勢力との交流を持つことを恐れている。イスラム教信者たちは、イラクやシリアで活動しているイスラム国（ＩＳ）などの過激集団を中国国内に呼び込むかもしれない、あるいは同調するという恐れも、中国政府にはあるだろう。彼らがゲリラ戦を展開したら、てこずることになるから、イスラム教徒の武装勢力化は、絶対に許してはならないことだろう。

◇漢民族支配

中国西部の新疆ウイグル自治区では、漢民族を入植させ、実質的に中国化を推し進めている。その進出の妨げになっていると思われているのがウイグル族だ。ウイグル族は「異端」とみなされている。少数ながら、敵対勢力でもある。軋轢が生じるのは無理のないことだ。しかし、中国政府は、敵対するものなら、何であろうと、力でねじ伏せるが国是である。法治国家の名において、力で押し切る。国家権力を振るうのが、中国政府が一番の得意なところだ。

法治国家とはおこがましい。「一党独裁国家」そのものだ。その一党の頂点に立つ国家主席は、さらに独裁的だ。習主席の「容赦するな」と、当局にはっぱをかける構図は、まさに独裁者だ。ウイグル族を弾圧しているのは、習近平その人だ、ということになる。

また近頃、中国政府が記録映画などでウイグルを宣伝することを盛んに行っているというが、欧米の批判を打ち消すためのプロパガンダだろう。〈強権的な統治を正当化するためのもの〉とバッサリ切り捨てるべきものだ。

◇独立運動

中央政府の圧政に苦しむウイグル人たちは、独立を願っている。しかし、独立運動をしようものなら、国家転覆罪として、徹底的に取り締まられる。彼らは、中国政府の度重なる弾圧に、耐え忍ぶだけになっている。独立を叫ぶものは、非国民扱いだ。

民族の独立は、中国政府が「民主化」とともに最も

警戒していることだ。他民族を抱える中国は、一つの民族や地域が独立すれば、次々に独立を要求する機運が高まることは目に見えている。中国の分裂だから、中央政府の危機意識は高い。分裂したら、中国の国力を損ない、共産党幹部たち・政治局の権威も薄らぐというものだ。一つのところで独立運動が起きれば、たたきつぶすしかない、と思っている。ウイグル人たちの独立運動の高まりは、中国政府の逆鱗に触れた形になっている。

◇強制不妊手術

２０２１年１月には、ウイグル新疆地区で、ウイグル女性たちに強制不妊手術を行っているという報道がされている。詳細な実態が明らかではないけれど、たとえ少数の女性たちだけ行われたことであっても、たいへんな人権侵害だ。

中国大使館は、「（ウイグルの）女性が自信と自立を保てる。子どもを産む機械でなくなった」として正当化する投稿をツイッターを出していたというのだから、あきれてしまう。正当化するための屁理屈であり、自国の政策を賞賛したことはあつかましすぎる。物は言いようだ。ツイッター社がこれを削除したのは、当然だろう。ウイグル女性への不妊手術を暗に認めた中国政府は、〈強制ではなく合意だ〉とでも言うのだろう。政治的権力を持っていれば、支配下の民族に対して何だってできるのだが、これは究極の「禁じ手」の一つだろう。中国政府はウイグル人を劣等人種とみなしているのだろうか。

⑩ 中国政府の台湾いじめ

【毎日新聞朝刊 2017/11/4 国際
海外で詐欺容疑などで、国外退去処分になった台湾人が、台湾ではなく中国に強制送還される事件が急増している。】

【読売新聞朝刊 2020/7/8 国際
中国軍機、台湾周辺で挑発飛行。】

【毎日新聞朝刊 2020/9/3 国際
チェコ上院議長らが台湾訪問したことを中国が非難し、対抗措置を示唆していることについて、ＥＵの独仏が相次いで非難、「脅しだ」】

【読売新聞朝刊 2021/1/25 総合、国際
中国船（民間の船、約２００隻）が台湾離島（馬祖列島）に大挙してやってきて海砂を大量採取した、台湾を挑発する、背後に軍がいる。】

【毎日新聞朝刊 2021/2/5 一面
中国が強大な海軍を持とうとしている。その膨張を加速している。中国上海市で2隻の強襲揚陸艦「０７５型」の建造が同時に進む。】
【毎日新聞朝刊 2021/2/6 国際
南米ガイアナに台湾が事実上の大使館に当たる代表機関「台湾弁皇室」の設置が合意されたと発表したところ、ガイアナ政府が破棄を表明。中国が圧力をかけた可能性がある。】
【毎日新聞夕刊 2021/3/3 総合
中国、台湾からのパイン輸入停止。蔡政権に打撃を与え、野党・国民党に有利な世論を醸成する目的がありそうだ。これまで中国からの圧力が強くなれば強くなるほど台湾の民意に「反中」の傾向が広がってきた経緯があり、逆に蔡政権に有利に働く可能性がある。】
【毎日新聞朝刊 2021/3/4 なるほドリ
中国政府が台湾産パイナップルの輸入を禁止。「何度も害虫が見つかった」とする。】
【週刊文春 2021/3/11号　ワクチンの世界事情】
台湾がドイツの製薬会社ビオンテックからワクチンを調達予定だったのに、中国が横槍を入れたとされる。台湾の衛生相ば「政治的圧力によって最終段階で交渉が決裂した」とぼやいている。】
【読売新聞朝刊 2021/4/13 総合
４月１２日、中国軍機の台湾防空識別圏進入が常態化した昨年以降、１日に入った機数としては最も多い２５機が進入した。戦闘機、爆撃機など。】
【読売新聞朝刊 2021/4/13 総合
台湾離島・馬祖列島で、砂浜が消えた。昨年１０月、中国船が大挙して海砂を採取したことで、環境破壊を引き起こした。漁に大打撃。島を結ぶ海底ケーブルが切断された。】

２０１８年に私は「中国の台湾包囲網」を書いた。本編は、その続編に当たる。蔡政権の台湾に対して、意地悪を繰り返している。その敵対的態度は、ますます強硬になってきており、圧力を増している。台湾を力ずくでねじ伏せようとしているかのようだ。
　軍事行動も辞さないと本気で思っているような行動をとるようになっている。〈軍事的な脅し作戦だろう〉などと楽観視できなくなっている。２月には、２隻の強襲揚陸艦の建造が進んでいることが報道された。これらは存在感が大きい。軍事的な脅威になりうる。台湾に、あるいは尖閣諸島に上陸作戦を計画していると

いう態度を示している。
中国軍用機を台湾防空識別圏に進入（浸入）させたりして、もし台湾側が挑発に乗って攻撃でも仕掛けてくれば、それにかこつけて一気に台湾軍を撃滅する……というシナリオもありそうだ。、
パイナップルの輸入禁止は、意地悪行為そのものだ。「害虫が見つかった」などと、もっともらしい理由をつけているが、口実だろう。意地悪をすればするほど、台湾の民意は中国から離れていくことなど、意に返さない。また、台湾がドイツ製のワクチンを購入しようとした際に、中国政府がそのメーカーを脅して取引を中止させたとされるのは、中国政府らしい、嫌がらせの方法と言えるだろう。
中国政府は、新疆ウイグルや、香港で民衆を押さえ込むことに成功した体験を積んでいるから、台湾の民衆が騒いだところで、力で抑え込めばいい、と思っている。住民感情など知ったことではないのだ。
中国政府は、どうしても台湾を取りたいと思っている。彼らの宿願だ。彼らは台湾を独立国家としては決して認めない。台湾は中国の属領であり「本来はわれわれ（共産党政権）が統治すべき領土だ」と思い込んでいる。
そのためには、台湾の現政権（蔡総統が率いている）を倒すことが第一だろう。台湾を締め付ければ、八方ふさがり的になり、そのうち音を上げて中国に屈服するだろうという企みだろう。中国にへつらうような政権が、台湾に誕生すれば一番いいのだろうけど……。台湾の人たちが、そんな強権的抑圧的政権を指向する候補者を選挙で選ぶとはとても思えない。

⑪ 英王室、生まれてくる子の肌の色は何色か

【毎日新聞朝刊 2021/3/9 国際
メーガン妃が米ＣＢＳテレビのインタビューで、第一子妊娠時、英王室内部から肌の色を懸念する声があったと明らかにした。】
【毎日新聞朝刊 2021/3/10 国際
メーガン妃が「どれくらい肌の色が濃くなるのかという懸念があったこと」を示したが、その発言について英女王夫妻説を否定した。ＴＶ番組司会者が明かす。】
【毎日新聞朝刊 2021/3/11 国際
メーガン妃発言で世論が二分、「人種差別で英王室ダメージ」「エリザベス女王への侮辱」】
【毎日新聞朝刊 2021/3/13 国際

ウィリアム王子が、メーガン妃発言めぐり、記者の質問に「王室は人種差別的ではない」と弁明。】

【毎日新聞夕刊 2021/3/24 総合

メーガン妃発言を解く、「英王室、第三の危機に」

王室内部の私的な会話を暴露した。人種的な偏見を持っている王族がいるかもしれないという批判の目が王室に向けられる。】

【週刊文春 2021-3月25日号

3月7日に米国で放送されたインタビュー番組で、生まれてくる子の肌の色が王室内で懸念された発言があったことを暴露したメーガン妃。その発言を誰がしたのかについて、メーガンは「ヘンリーから聞いた」といい、ヘンリーも明言を避けた。また、２０１８年の挙式の際、義姉のキャサリン妃（39）に「泣かされた」と明かした。英国内では夫妻の株は暴落。「コロナ禍の大変な時にやるべきことだったのか」との声があがっている。】

3月7日にメーガン妃（39）が、アメリカで公然と英王室の陰口を叩いた。2時間のインタビューで、内容はほとんど、メーガン妃の不満とぐちだったとされる。中でも、物議をかもしたのが、王室内で「生まれてくる子の肌は何色か」という発言があったというものだ。

だれがそんなことを言ったか、どんなつもりで言ったかが疑問になるのだが、メーガンは「ヘンリーから聞いた」とし、そのヘンリーは「（それを発言したのは）女王夫妻ではない」とするだけで、特定しなかった。

ヘンリーが気さくに話せる相手としては、兄のウイリアムぐらいだろうから、ずばり、ウイリアムの可能性が高い、と私はにらんでいる。あるいは、メーガンと対立しているとされる、その妻キャサリン妃が発した言葉が兄弟を通じて伝わった可能性もある。

兄弟の、たわいのない会話だったかもしれない。彼は単なる好奇心的な発想で言ったのかもしれない。けれど、肌の色が白かろうが、黒かろうがどちらでもよかったのかもしれない。黒い肌もありうる、という遺伝的な可能性を口に出しただけのことかもしれない。その疑問文だけで「肌の色を懸念した」とするのは、考えすぎたろう。

しかしながら、その言葉を伝え聴いたメーガンは、黒人の母を持つ自分に僻(ひが)みがあるから、一番気にするものだろう。黒い肌の子を生んだ妃となれば、イギリ

ス人たちに母子ともに蔑視されるかもしれないという不安が生じる。

ヘンリーにしても、「〇〇がこんなことを言ってたよ、生まれてくる子の肌の色は何だろうかってね」などと、メーガンに告げ口したことも、あまり良いことではなかった。雑音を聞かせたことになる。「オレはそんなこと気にしてないけど」などと付け足しても、もう遅い。メーガンの顔色が変わったことだろう。〈肌の色を気にするのは、黒人に対する差別意識があるからだ〉と思われても仕方がない。

満を持したかのように、インタビュー番組で、「英王室には、黒人に対する差別感情がある」と世界中に言いふらしたメーガン。イギリス国民からすれば、イギリス王室を人種差別という一番刺激的なレッテルを貼ってくれたことで、「造反者」とみなすことだろう。それがウソであれ、真実であれ、英王室を貶(おとし)めたことになる。

発言者をぼかしたことは、エリザベス女王陛下がおっしゃったかのようにも受け取られる。女王の名前を出すわけにはいかないから、はっきり言わないのだろうと疑われる。女王の陰口を叩いたことにもなるから、メーガンはますます嫌われることになりそうだ。

そのレッテルは、世界的な影響力をもつ。イギリス連邦全体、特に旧植民地の人々は、人種差別に敏感だろう。彼らは「やっぱり、英王室はわれわれを差別するのだ」と思い始めると、離反を招く。連邦そのものがあやしくなるだろう。

メーガンには、そんなことは知ったことではないのかもしれない。実質的に英王室から離れ、優雅なアメリカ暮しをしており、王室を信奉するイギリス国民に、いくら嫌われようと、それは想定内のことで、気にしていないのかもしれない。「誰かさんと違って、私は黒人女の娘です。もともと私は、イギリス人に嫌われてますヨーダ」と開き直ったりして。

アメリカで、それなりの収入が確保され、セレブとしてもてはやされていればいいのだろう。彼女自身、英王室で差別の被害者として振る舞えば、アメリカではそれなりに理解され、さらに差別に対抗する姿勢を見せればヒロインになれると思っているのだろう。これからも英王室の悪口を言いまくって、本を出したり、テレビ出演の機会を増やしたりすれば、実利が得られるし、ますますスター的な存在になれると目論んでいたりして……。

義姉のキャサリン妃に「泣かされた」という発言に

関しては、勝手な行動をしがちなメーガンのことだから、英王室の伝統的な作法やふるまいを無視したことで、先輩格のキャサリン妃に「怒(おこ)られた」と解釈する。

⑫ プーチンの「永遠の免責」

【読売新聞朝刊 2020/11/17 国際
ロシア下院、大統領経験者の免責特権を審議、訴追回避を優先している。改憲前は「在職中の事案」に限定されていた。免責の対象期間に関する記述が、前や退任後も強制捜査の対象とならないように配慮された。ロシア有力紙ベドモスチは、現職への免責特権と合わせ、プーチン氏に対する「永遠の免責」と評している。】
【週刊文春 2021/2/4号 プーチンの宮殿に愛人の豪邸
「プーチン大統領のための宮殿」が1月19日にＹｏｕＴｕｂｅで公開された。資産価値推定1，000億ルーブルの宮殿をドローンで撮影した「反汚職基金」を主宰するアレクセイ・ナワリヌイ（44）は昨夏に神経剤ノビチョクを投与され重体になった。彼は「豪華な内装や家具で頭にきた建設関係者が情報を提供した。世界最大の賄賂によるものだ」と強調している。政権の利益誘導で大富豪となった取り巻きの新興財閥が建設資金を提供したとみられる。その他、ロシアでプーチンは豪華な公邸や、国内二十カ所に宮殿や別荘を持つとの噂がある。愛人とされる複数の女性がそれぞれ豪邸を持つという疑惑も報じられた。】
【毎日新聞夕刊 2021/3/19 総合
ロシアのプーチン大統領は18日、バイデン米大統領が「プーチン氏を人殺しと思うか」との米メディアの質問に「そう思う」と肯定したことについて、「お大事に。彼の健康を願う。これは皮肉でも冗談でもない」と述べた。】

プーチンは大国ロシアの「実質的な皇帝」として、君臨してきた。汚職や横領、選挙の不正、反対派の要人の殺害、企業の同族支配化の疑いが常につきまとう人だ。これだけ思う存分に絶大な権力を振るうことができるのだから、大統領を辞められなくなっている。
　世界の平和を脅かす人だ。世界各地の紛争地域にはロシア軍の影がある。プーチン政権は、それらの独裁的な政権側を支援する傾向があり、紛争を長引かせる要因になっている。核兵器の保有量も世界一であり、減らそうとはしない。領土拡張にも、強いこだわりがある。

近年では、五輪に関係する組織的なドーピングおよびそのデータの改ざん、ワクチン開発へのサイバー攻撃が判明している。反体制派指導者を毒物での暗殺未遂事件も最近起きた。

ロシア政府機関が関与していると疑われる組織的な悪行は、トップの意向の反映だろうし、〈部下がやったこと〉にできない責任がトップにあるだろう。

3月に、バイデン米大統領がメディアの質問にのって「プーチンは人殺しと思う」と答えてしまった。私も質問されたら、そう答える。でも、バイデン氏の場合「外交辞令」を意識しなければならないところだった。それを伝え聞いたプーチンは否定しなかった。心の中では、「はっきり言ってくれたな、アノヤロー、オレを怒らせたいんか？」とはき捨てたりして……。

近年、ロシアでは、あるいは海外にまで飛び火して、数々の暗殺事件や不審死が起きたことが報道されている。彼らは反政権派の野党指導者、政府に批判的な記者、裏切りの二重スパイだった。トップの意向を反映した組織的なミッションによるものとみなすことができる。トップに殺意があったわけだ。昨年12月には、ロシア反体制派指導者アレクセイ・ナワリヌイの毒殺未遂疑惑で、プーチンは「オレが毒殺したいのなら、最後までやる」と豪語した。

特記すべきは、プーチンが「永遠の免責」を得られることだ。

大統領退任後であっても、何の罪に問われない「お墨付き」を得ることになる。大統領退任後、私はそれらが裁かれるのではないかと期待していたが、すべて罪に問えないことになる。「人殺しのプーチン」であっても、罪に問われず、のうのうと余生を過ごすことができる。「永遠の免責」を手に入れることは、法治国家としては、最悪の免責特権だろう。他人に法の遵守を言えた義理ではなくなる。

これでは、どんなに汚職をしようと、殺人を指令しようと、罪に問われることはない。

プーチンは改憲を行って、それを可能にしようとしているのだから、彼の権力はそうとうに強い。彼個人のための改憲だろう。彼は「罪に問われること」をたくさんやってきたから、そんな免責特権をほしがっているわけだ。

免責が必要なのは、むしろ、トップの命令によって職務として悪行を実行した人々だろう。彼らの証言や物証と引き換えに免責とすれば、すべて明らかにできることだ。

⑬　5万円ばらまきを公約にして当選する

【毎日新聞夕刊 2021/2/3 社会
「市民に5万円」を公約にして当選した丹波市長、2万円の商品券の給付に修正したが、議会で紛糾し否決された。】

丹波市民の良識が問われる。そもそも、金品をばらまくことを公約にするような候補者を当選させてはまずい。それが市長となり、公約とは幾分控えめに、5万円を2万円の商品券にして議会にかけたけれど、結局、議会で否決されたわけだ。議会で紛糾したというから、賛成意見も根強くあったわけだろう。

市民のすべてに一律にそれを給付するためには、現実的に財源の問題がある。そんなことをしては、市の財政がおかしくなり、増税を考えなくてはならなくなりそうだし、あるいは赤字債券を発行するかだ。現に、これより前の２０２０年5～6月、安倍政権が補正予算を組んで、気前よく全国民を対象に１０万円を給付したが、赤字国債を際限なく発行してのやりくりだった。

だれでも金品はほしい。市から5万円を給付されるのなら、うれしいことだ。しかし、たとえ財政上の問題がないとしても、丹波市だけというのは、全国的に考えれば、不公平であり、ずるいというものだ。一般良識に欠ける。

コロナ禍にかこつけて5万円をばらまくことを公約にした候補者を丹波市民が選んだことは、賢い選択とは思われないだろう。ずる賢い選択をしたと言うべきだ。丹波市の恥とされるかもしれない。

そもそも、選挙の公約としてカネをばらまくというのは、「反則すれすれ」の行為だろう。買収の手口そのものだ。カネをちらつかせるやりかたは、フェアではない。

その候補者が当選したことは、市民の多くが5万円という「甘いしる」に釣られてしまった結果だと、世間の人に思われても仕方がない。民主主義の選挙において「甘いしる」を振りまく公約は、確かに当選に必要なアイテムの一つだろうけれど……。当選したら、そんな公約など忘れてしまうのが普通の政治家だろう。